

Ⅷ—1 柏崎市における総合的な学習の授業と評価の工夫

(1) 本市における総合的な学習への取り組み

① 最近の研究動向

柏崎市における総合的な学習の時間の実践は質的に高い状況にあるといえる。それは、全国的にも先進的な取り組みを進めてきた上越市の影響を強く受けている。上越市立大手町小学校、上越教育大学学校教育学部附属小学校などの先進校の実践を参考にし、熱意のある教師と地域の人々が地域素材を生かした豊かな実践を創造してきた。

平成10年には、柏崎小学校が地域との連携を強調した「ともに歩む」に実践をまとめた。平成12年には、比角小学校が新潟県小学校教育研究会指定の教育課程研究会を開催し、「YORONGO」に総合的な学習の実践と理論をまとめた。平成13年には、瑞穂中学校が新潟県中学校教育研究会指定の総合的な学習の時間研究会を開催した。このように学習指導要領の移行期における意欲的な研究が市内の数校で行われた。特に、比角小学校の全体計画と実践は全国的にも高く評価され、平成14年に刊行された国立教育政策研究所教育課程研究センターの『総合的な学習の時間 実践事例集(小学校編)』に掲載された。

市内における中核的な学校の先進的な取り組みを受け、23小学校、10中学校がそれぞれに意欲的な教育活動を進めていった。また、この時期、柏崎市教育委員会が学校の教育活動の全体像を示す「グランドデザイン」の制作を積極的に押し進めた。こうした行政側からの支援もあり、市内全ての学校で「総合的な学習の時間」の全体計画も整備され、質的に高い「総合的な学習の時間」が成立してきた。

② 「内容系列表」の作成

市内各校においては、全体計画や学年別活動構想を基に、意図的計画的な「総合的な学習の時間」の実践を進めてきた。平成14年には、柏崎市刈羽郡の指定研究として二田小学校が「総合的な学習の時間」の公開を行った。また、枇杷島小学校は評価にターゲットを絞った研究を行い、継続的な子どもの学習の様子を見取る実践研究の様子を自主公開してきた。しかし、こうした一つ一つの教育実践やその計画は学校独自のものであった。内容や領域、学年間、学校間のつながりについて、情報交換をしたり地域全体で整備したりしようとすることは行われてこなかった。

今回、柏崎市立教育センターで試案として作成した「内容系列表」は、これまでに地域で取り組んできた実践を振り返り作成した。また、地域にある学習材や学習対象などの教育資源を視野に入れて作成した。そして、小学校から中学校への発達段階を意識して、系統的な内容の配列を意識して作成した。つまり、柏崎市の「総合的な学習の時間」のローカルスタンダードとして機能することが期待できるものである。

作成にあたっては、以下の点に配慮して行った。

- ・各学校の実践が生かされる幅広い領域の設定
- ・発達段階の段階的な設定
- ・生活科からの連続、発展

「総合的な学習の時間」内容系列表（柏崎市立教育センター試案）

生活科		「総合的な学習の時間」			
1・2年生		ねらい	3・4年生	5・6年生	中学校1・2・3年生
目標	内容				
具体的な活動や体験を通して、自分と身近な人々、社会及び自然とのかかわりに関心をもち、自分自身や自分の生活について考えさせるとともに、その過程において生活上必要な習慣や技能を身に付けさせ、自立への基礎を養う。 (7)動植物の飼育栽培と生き物への親しみ (8)自らの成長への感謝の気持ち	(1)楽し学校生活と安全な通学路	(1)自ら課題を見付け、自ら学び、自ら考え、主体的に判断し、よりよく問題を解決する資質や能力を育てること (2)学び方やものの考え方を身に付け、問題の解決や探究活動に主体的、創造的に取り組む態度を育て、自己の生き方を考えることができるようにすること	国際理解 a 日本の歴史や文化に進んで親しみ、よさに気付く b 世界の様々な国の歴史や文化などに進んで親しみ、それぞれのよさに気付く c 世界の様々な国の人と交流しようとする d 外国語に興味関心をもち、歌や言葉に親しむ	a 日本の歴史や文化を理解し、大切にしようとする b 世界の様々な国の歴史や文化などを理解し、それぞれのよさを尊重しようとする c 世界の様々な国の人と積極的に交流しようとする d 外国語による日常会話に慣れ親しむ	a 自国の歴史や文化を正しく理解し、日本人としての自覚をもつ b 他国の歴史や文化を正しく理解し、尊重する c 異なる考えの人や世界の人と交流し、協力して活動しようとする d 外国語によるコミュニケーションを図ろうとする
	(2)家族と家庭生活における自分の役割、規則正しい生活				
	(3)地域の色々な場所と自分の生活とのかかわり	環境 a 自然に親しみ、自然の大切さを知る b 身近な環境問題を知り、自らの生活とのかかわりに気付く c 環境問題に関する地域の取組を知り、自分からできる事に取り組もうとする	a 自然や環境への関心を高め、自然を大切にしようとする b 人間の生活の営みが環境に大きな影響を及ぼしていることを考える b 環境に配慮した行動の価値を知り、自ら進んで取り組もうとする	a 多様な視点で自然や環境を理解し、自然と人間の営みを考える b 環境問題と自らの生活とのかかわりを理解し、地球的な視野で自然との共生を考える c 自らの行動が環境に及ぼす影響を知り、日常的継続的に実践しようとする	
	(4)公共物や公共施設の安全で正しい利用				福祉 a 高齢者、障害者などの存在に気付く、相手の立場を考えて接する b 社会には、高齢者や障害者の生活に対する配慮や工夫がなされていることに気付く c 身近な福祉の問題に関して、できることをしようとする
	(5)季節や地域行事と自分の生活の工夫	地域・郷土 a 地域の生活や文化に関心をもち、そのよさに気付く b 地域を支える人の活動に気付く c 地域社会の一員として、自分にできることを実行する	a 地域の歴史、文化、産業などの特色を知り、郷土を愛する心をもつ b 地域を支える人の活動を理解し、現状や問題点に気付く c 地域社会の一員としての自覚をもち、よりよい郷土を創り出すための行動をする	a 多面的、継続的に地域の実情を捉え、地域を支える住民の一人としての誇りをもつ b 地域を支える活動を多面的に捉え、解決の方法を探る c 地域社会の一員としての誇りと自覚をもち、協力して豊かな地域の創造を目指した行動をする	
	(6)自然や物を使った遊びの工夫				生 a 自分の心や体に関心をもち

			命・健康・食	ち、健康な生活や食生活について考える b 身の回りの様々なものに命があることを知る c 生き生きと生活したり、食事をしたりしようとする	のちの大切さについて考える b 身の回りの様々な命が互いに関係し合っていることに気付く c 豊かな食生活や自らの可能性を發揮した生き生きとした生活を送ろうとする	りよく生きることについて食生活を含めて考える b 一つ一つの命のかかわりが社会を形成していることを知る c 食生活の大切さを意識し、命の尊厳と可能性に基づくよりよい生活を送ろうとする
			エネルギー	a 生活がエネルギーによって支えられていることに気付く b エネルギーが生産されていることを知る c 日常生活におけるエネルギーの省力化を考える	a 生活を支えるエネルギーの多様さや重要さを理解する b エネルギー生産の安全性と危険性を理解する c 貴重なエネルギーを有効に活用した日常生活を考える	a 世界的な視野でのエネルギー確保と省エネルギーの意味を知る b 地球規模のエネルギー生産と需給を理解し、将来の社会の在り方を考える c 日常生活の全てがエネルギーとのかかわりであることを理解し、持続可能な社会の在り方を考える
			人権	a 様々な人の立場や個性の違いに気付く b 互いのよさに気付き、協力する c 物事を公正に判断する	a 互いの立場や個性を知り、互いを尊重しようとする b 差別や偏見を許さず、互いに支え合おうとする c 社会における様々な事象を公正に捉え、的確に判断する	a 互いの立場や個性を理解し、互いの尊重し合い、思いやりをもって行動する b 差別や偏見をなくし、互いが認め合え生かし合える社会を築こうとする c 社会における差別や偏見にとらわれずに正しく事実を捉え、適正に判断する
			進路・生き方	a 働く人の存在を知り、働くことの意味に気付く b 様々な仕事の存在に気付く c 自分自身のよさを發揮し、意欲的に生活しようとする	a 働く人の喜びや苦勞を知り、労働の意義を考える b 仕事と社会とのかかわりを考える c 自らの成長を振り返り、これからの自分の在り方を考える	a 共に働くことを通して働くことの価値や社会的な意義を理解する b 仕事が生産を支えていることを理解し、社会の生きるために仕事に従事することを考える c 将来の職業選択やよりよい生き方を考え、自己を高めようとする

注：生活科の内容

- (1) 学校の施設の様子及び先生などの学校生活を支えている人々や友達のことが分かり、楽しく安心して遊びや生活ができるようにするとともに、通学路の様子などに関心をもち、安全な登下校ができるようにする。
- (2) 家庭生活を支えている家族のことや自分でできることなどについて考え、自分の役割を積極的に果たすとともに、規則正しく健康に気を付けて生活することができるようにする。
- (3) 自分たちの生活は地域の人々の様子や場所とかがわっていることが分かり、それらに親しみをもち、人々と適切に接することや安全に生活することができるようにする。
- (4) 公共物や公共施設はみんなのものであることやそれを支えている人々がいることなどが分かり、それらを大切に、安全に気を付けて正しく利用することができるようにする
- (5) 身近な自然を観察したり、季節や地域の行事にかかわる活動を行ったりして、四季の変化や季節によって生活の様子が変わることに関心を持ち、自分たちの生活を工夫したり楽しくしたりできるようにする
- (6) 身の回りの自然を利用したり、身近にある物を使ったりなどして遊びを工夫し、みんなで遊びを楽しむことができるようにする
- (7) 動物を飼ったり植物を育てたりして、それらの育つ場所、変化や成長の様子に関心をもち、また、それらは生命をもっていることや成長していることに気付き、生き物への親しみをもち、大切にすることができるようにする
- (8) 多くの人々の支えにより自分が大きくなったこと、自分でできるようになったこと、役割が増えたことなどが分かり、これまでの生活や成長を支えてくれた人々に感謝の気持ちをもつとともに、これからの成長への願いをもって、意欲的に生活することができるようにする

(2) 実践校の紹介

① 柏崎市立柏崎小学校

新潟県柏崎市立学校町1番88号

【学年別学級数及び児童生徒数】

	1学年	2学年	3学年	4学年	5学年	6学年	特	合計
学級数	3	4	3	3	3	3	3	22
児童数	79	98	97	89	84	90	12	549

【教職員別人数】

校長	教頭	教諭	養護教諭	事務主任	用務員	講師	介助員	合計
1	1	29	1	1	1	2	3	39

【学校の沿革】

明治6年創立の歴史と伝統のある小学校である。市内はもとより新潟県の中核的な研究学校として数多くの優れた実践研究を残してきた。平成に入ってから学力向上実践校、視聴覚教育研究校、北信越図書館教育研究校、NIE、小中連携による基礎基本定着研究などの教育研究を行ってきた。

学校は、市内の中心部に位置し、周辺には官庁や商店街が広がる。また、周囲に教育施設、文化施設、スポーツ施設などがあり、恵まれた学習環境にある。保護者の教育に対する期待は大きく、学校教育に対する協力を惜しまない風土がある。

② 柏崎市立松浜中学校

新潟県柏崎市松波3丁目7番5号

【学年別学級数及び児童生徒数】

	1学年	2学年	3学年	合計
学級数	2	2	2	6
児童数	47	48	65	160

【教職員別人数】

校長	教頭	教諭	養護教諭	事務主任	用務員	講師	指導補助員	合計
1	1	10	1	1	1	4	2	21

【学校の沿革】

昭和59年、柏崎市立荒浜中学校、高浜中学校が合併して創設した比較的新しい学校である。平成5年には郡市指定音楽教育研究会を行った。また、平成14年には郡市指定「総合的な学習の時間」研究会を開催し、近隣の中学校の先導的な役割を果たしている。

校区は日本海に面し、南北13kmにもおよぶ。保護者や地域は学校に大きな期待を寄せており、協力的である。校区内にある二つの小学校や養護学校との連携・交流が進められている。

(3) 年間単元指導計画の作成

① 「内容系列表」活用の状況

柏崎市立教育センターの「内容系列表（試案）」は、現段階では広く公表されているものではない。今年度は、本研究実践校2校（小中1校ずつ）と柏崎市立教育センター調査研究委員6名（小4校、中2校：柏崎小学校、松浜中学校を含む）の中で検討し、活用が図られてきた。したがって、現段階では市内の6校において、部分的に実践に生かされているという状況である。

しかし、教育センターでの研修会等では内容系列表（試案）を市内全学校へ配布してほしいとの声も挙がってきており、現場のニーズは高まってきている。それは、自校の学年別学習活動が系統的なものになっているのかという不安があるからだ。また、自校のプランが十分に吟味された内容を伴っていないのではないかと心配があるからである。

先ほど記した6校においては、単元を設定する際に内容系列表のどの部分に当たるのかを検討し、その内容に迫るような目標の設定、学習活動の構想、評価規準の設定などを行ってきた。

② 「内容系列表（試案）」活用の留意点

各学校で学習活動を構想する際には、次のような手順を意識して内容系列表（試案）を活用してきた。

ア 自校の既存のカリキュラムにある「総合的な学習に時間」の実践例と子どもの実態、教師の願いをもとに活動構想をする。

イ 構想の概略をもとに、単元の目標を設定する。その際、同時に、内容系列表（試案）のどの内容を指導するかを確認する。

ウ 目標に迫る学習活動となっているかどうかを視点に学習活動を構想し直す。

エ 目標とおよその学習活動から評価規準を各観点毎に設定する。

また、実際の活動を見直す際にも内容系列表（試案）を活用した。この場合、活動自体

が目標に迫るものとなっているかを見直すと共に、内容系列表（試案）を見直すことも心がけた。内容系列表（試案）は過去の実践例から構想したものであり、このため、実際に子どもの学習する姿に適合しているかどうかを追試するという問題は常に存在している。そこで、実践の子どもの姿から内容系列表（試案）自体を見直すという意識を持ち続けた。

そして、もう一つ内容系列表（試案）の重要な役割として、説明責任を果たす際の資料として機能するという特徴がある。学校全体として、あるいは学年で保護者に「総合的な学習の時間」の説明をする際、学年間の系列や学習内容を明確に示すことができる。これは、学校としての説明責任を果たすことにつながる重要な機能である。

（４）単元指導計画のフォーマットとその作成要領

単元指導計画は、第Ⅱ章第５節に示されたフォーマット及びその作成要領に沿って作成することにした。

すなわち、①単元指導計画の対象学年及び担当者の決定→②単元名及び学習活動の決定→③単元設定に関わる「教師の願い」の決定→④単元設定に関わる「子どもの実態」の記述→⑤単元の目標の決定→⑥単元の評価規準の作成→⑦学習過程における単元の評価規準の具体化と評価資料の決定→⑧評価資料（略）→⑨評価基準の設定→⑩評価の三つの機能への対応計画の決定の順に沿って単元指導計画を作成することにした。

以下、この中から、本市なりに工夫した点や留意した点などを、実際の取り組みを踏まえて記すことにする。

<① 単元指導計画の対象学年及び担当者の決定に関して>

「総合的な学習の時間」の実践経験が豊富で充実した学習活動を展開している担当者に実践研究を進めてもらえるようにした。したがって、対象学年はその実践者の担当している学年を対象とした。学年、担当者名、小中学校の別が分かるように記述した。

<② 単元名及び学習活動の決定に関して>

単元名については、実践者の学年が構想していた単元名を使った。子どもへの呼びかけとなりスローガンとして掲げられる単元名、学習活動がイメージできる単元名を設定している。

<③ 単元設定に関わる「教師の願い」の決定に関して>

教師の願いは大きく二つで構成して記述した。一つ目は、単元において何を指導したいのか、そのねらいや内容や意識して記述した。二つ目は、前述のねらいや内容を実現するために、どのような学習過程を組織していくのかを記述するよう心がけた。ここで、内容系列表（試案）のどの内容を学習するのかを記述した。

<④ 単元設定に関わる「子どもの実態」の記述に関して>

子どもの姿は、本単元の学習活動に関わる子どもの姿を記述した。日常生活の様子や前学年や前単元での学習の様子を記述する際も、本単元とかかわりのある部分のみを記述することとした。

<⑤ 単元の目標の決定に関して>

単元の目標は「・・・（の活動）を通して、・・・を考えたり、分かり、理解し、・・・（生活）できるようにする。」という一文の形式にあてはめて記述した。最初の「・・・（の活動）を通して」には、中核となる活動を記述した。「・・・を考えたり、分かり、

理解し、」には、内容系列表（試案）を参考にして学習活動を通して学ぶ内容を記述した。「・・・（生活）できるようにする。」には、実践や行動といった生活化の姿、自らを見つめ振り返る姿を意識して記述した。

<⑥ 単元の評価規準の作成に関して>

「関心・意欲・態度」では、実践者が期待している心的傾向性を記述し、「・・・に関心を持つ」「・・・しようとする」の文末表現とした。この観点の評価規準は複数個にならない場合もあると考えて設定した。

「思考・判断」では、一連の問題解決のサイクルで必要とされる力、比較・類推・分類・関連付け・序列・類型などの思考する力、自分の生活との関連を考える力から記述した。この観点だけは、単元において複数個の評価規準が必要と考えた。

「技能・表現」では、思考・判断の結果として身に付くことが期待される技能・表現を記述した。文末表現は「・・・できる」などとした。

「知識・理解」では、思考・判断の結果として身に付くことが期待される知識・理解を記述した。文末表現は「・・・分かる」「・・・理解する」などとした。

<⑦ 学習過程における単元の評価規準の具体化と評価資料の決定に関して>

「単元の評価規準」の実現状況を学習過程のいつ、どこで評価するかを考え、それを具体的な学習活動の過程に○付き数字にて位置づけていった。その学習過程に位置づけられた単元の評価規準が「学習活動における具体的な評価規準」である。また、同時に、「学習活動における具体的な評価規準」の実現状況を評価するために活用する資料やワークシートなど、実際の評価で使う資料を明記していった。

<⑧ 評価資料に関して>

⑦に述べたようにして学習活動の相当する箇所に評価資料を定めていった。その際、二つの評価規準がある場合は、一つの評価規準には一種類の評価資料を対応させ、その実現状況を見取るように心がけた。

<⑨ 評価基準の設定に関して>

「評価基準表」の学習活動と学習活動における具体的な評価規準と評価資料とが一对になった欄ごとに、具体的な評価規準の実現状況を判定するための評価基準を設定していった。おおむね満足とされるB基準を定め、次にB基準に満たない状況をC基準として定め、最後に、十分満足とされるA基準を定めた。設定に際しては、実際の子どもの姿を想定し、具体的で客観的な指標となるように心がけた。学習の実現状況を事実に・行動的に表すものとして、例えば「・・・している」などという文末表現とした。

<⑩ 評価の三つの機能への対応計画の決定に関して>

単元全体を通して、指導と評価の一体化や子どもの自己学習力の向上に向けた評価にいかに向けるか、また、保護者等外部への説明責任に向けた評価の工夫に関する計画をあらかじめ構想し、記述するよう心がけた。

(5) 授業と評価の実践に向けて

① 指導と評価の一体化の工夫

指導と評価の一体化に向けた評価活動は、授業の最初から最後まで絶えず営まれる活動であり、その評価活動は教師が予め作成した単元指導計画に基づいて実践される。そのも

とで、子どもが学習活動を展開し、教師は評価規準の実現状況を多様な資料から評価していく。そして、その評価結果を基に指導計画の修正や改善を行い、実践に反映していく。こうした一連のサイクルを指導と評価の一体化と考える。

なお、単元指導計画における「5 学習過程と評価計画」では、単元の評価規準がどの場面で評価されるか、また、何回評価されるかをチェックすることが可能であり、指導と評価の一体化のために役立つものとする。

さて、指導と評価の一体化のために取り組んだ実際の特徴は、次の点にある。それは、指導・学習過程と評価結果、その評価結果に基づく次後の指導の改善・実施を一つの基本単位と考えたことである。これまでも教師の指導と子どもの学習活動の相互作用が言葉のやりとりや子どもの活動を中心に記述されてきた。時には、学習カードや写真などを交えて記されてきた。しかし、これまでは、教師の学習指導が目指す教育効果をどの程度あげているかを評価し、その評価結果を基に、予め作成した指導計画の是非を判断し、時には修正しながら次の指導に臨むといった指導と評価の一体化の足跡を記録することは少なかったように思われる。あるいは、あったとしても印象的な主観に基づくものであったように思われる。

本研究では、この指導と評価の一体化作業の跡を記録として残すために、単元指導計画に基づく教師の支援と子どもの学習活動の実際の様子を、「学習活動における具体的な評価規準」ごとに、「①指導・学習の過程」として記述し→次いで、そこにおいて意図された観点別の評価規準の達成状況が子どもの学習資料・情報を基に「②評価結果」として検討し→さらに、その評価結果に基づいて事後の指導をいかに工夫し展開したのかの特質を「③指導の改善と実施」として記述するという体裁を工夫したのである。

② 自己学習力の向上に向けた工夫

「生きる力」を育てる上から、教師の支援を得ながら、子どもが問題解決力、すなわち、問題解決の過程で学習目標に照らして自己の学習の過程や成果を絶えず評価し、解決に向かうという自己学習力を身に付けることが大切である。こうした姿に子どもが成長するためには、大きく二つのレベルで意図的な評価活動を行うことが必要であると考えた。

最初のレベルは、教師主導で学習活動や評価活動を展開するレベルである。もう一つは、教師の支援の下で子どもが評価規準を定め、自己評価するものである。

最初のレベルへの対応として、次のような取り組みを行った。一つは、教師による問題解決授業の工夫と実現である。もう一つは、授業中の具体的な評価活動における工夫である。例えば、具体的な評価基準を予め伝える、評価資料を予め提示し、評価方法を説明する、学習成果を蓄積し、継続的な振り返りを授業中に行うなどである。

二つ目のレベルへの対応としては、中間発表会から最終発表会へと結び付けていく単元構成の中で、子ども自身が評価規準と評価基準を設定していくということが考えられる。実際に定めた評価規準とその実現状況を判断する評価基準によって自己評価を進めていくことができる。

③ 外部への説明責任に向けた工夫

保護者等外部への説明責任を果たすためには、様々な機会と多くの場面での方法が考え

られる。本研究では、指導要録や通信簿への作成を念頭に入れながら、各單元における総括的評価及び個人内評価の工夫を行うことにした。

そして、そのために、学習活動の展開に応じて実施する評価規準の実現状況の結果を<個人評価結果表>に記録し、保存することにした。その際、評価結果Aは3点、Bは2点、Cは1点とし、得点化できるようにした。そうすれば、この個人評価結果表を基に次後の指導の修正・改善を絶えず図ることも容易になるし、また、子ども一人一人の観点別の総括的評価結果の算出及びクラス・学年全体の総括的評価結果の算出も容易になる。

なお、今回の開発的研究においては、單元全体の総括的評価においては、4観点間の重み付けをすることはせず、等価値的に扱っていかうと考え、実施した。なぜなら、4つの観点はどれもが自己教育力を育成する重要な資質・能力であり、どれ一つを欠いても子どもの豊かな学びは成立しないと考えているからである。なお、各観点に関して複数回以上評価する場合には、それらすべての評価結果の総和によってもよいし、あるいは特定の箇所の評価結果によってもよいことにした。

一方、個人内評価に関していえば、今回は、観点間経時的評価と観点内経時的評価によって評価を行うことにした。

観点間経時的評価においては、4つの観点相互の発達的特質が学習の展開につれどのように変化しているか、その推移的特質を個々人毎に明らかにしようとした。

一方、観点内経時的評価においては、各観点別の変化的特質を時系列的に追うことで、個々の子どもの伸びや進歩、課題などの発達的な特質を捉えようとした。

そして、このような評価結果を指導の改善に生かしたり、自己学習の推進に役立てたり、さらには外部への説明責任に活用しようとする意図したのである。